



「あいまいな」存在としての「在日」像 : 大江健三郎の『叫び声』を中心に

金, 冷垠

(Citation)

海港都市研究, 創刊:71-83

(Issue Date)

2006-03-24

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/80030008>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/80030008>



「あいまいな」存在としての「在日」像

— 大江健三郎の『叫び声』を中心に —

金 冷 垠

(KIM Youngeun)

I. 初めに

大江健三郎のアジアに対する様々な発言は単に発言だけにとどまらず、小説という方法を通してもしばしば表れている。とりわけ彼の初期作品には日本に住まざるを得ない朝鮮半島から渡ってきた人々の話や朝鮮戦争のことがたびたび描かれている。これは彼がエッセイ¹で言及しているように、いわゆる「在日」²に対する幼児の記憶から起因しているかもしれない。

このように「在日」がよく登場するにも関わらず大江文学の研究において、彼らについてはあまり論じられてはない。しかし大江健三郎のアジアに対する眼差しがアジアの問題だけではなく、その延長線に日本自身の問題が横たわっているように、大江作品の中での「在日」は日本社会を相対化する上で重要な役割を果たしていると思われる。そのような意味から大江の作品に書かれている「在日」について注目したいと思う。

特に当時小松川事件での少年を素材にした『叫び声』(1962年、『群像』)を中心に探してみたい。小松川事件をめぐっては殺人を犯した在日の少年に死刑が宣告されたことでさまざまな議論が行なわれた。小松川事件は当時日本社会に潜んでいた在日の人に対する問題を表面化させ、日本社会の大きな波紋を投げかけたのである。

このような事件をモデルとして書いた『叫び声』には「日本は在日韓国人、在日朝鮮人への差別というようなことを見ないでいる」³と語った大江の心情がよく反映されていると思われる。特に六〇年代の日本社会を背景にした上で日本の青年たちのシンボルとして

1 『文学ノート、「朝鮮人」』大江健三郎、新潮社、1974年、11月、9p、大江は「戦争中、森か材木を伐り出す仕事をやらせられてきた朝鮮人たちがな、連中は強制連行の朝鮮人だというんだが、おとなしく暮らしてきた川下の小屋がけから、敗戦の日にそろって出てきたんだよ。それをおれは記憶しているんだ。」と語っている。

2 ここでの「在日」の意味は「在日韓国人」、「在日朝鮮人」の両方を指す言葉として使われている。

3 『日本の「私」からの手紙』、大江健三郎、岩波書店、1996年、1月、55p。

投影された在日の青年像に注目することによって大江の小説を新しく読み直すことができるだろう。

II. 小松川事件をめぐる波紋

小松川事件というのは1958年8月21日に東京の小松川高校で在日朝鮮人であった李珍宇が女子生徒を殺した事件である。当時18歳の李少年は小松川事件の前に自宅の付近でもうひとつの殺人を犯していたことがわかり、さらに社会に衝撃を与えた。

当時新聞は事件をセンセーショナルに扱い、結局李少年は死刑の判決を宣告されるようになった。しかし事件から2年後の1960年8月に都立大教授の旗田魏氏を中心に「李少年を助ける会」が結成され、大岡昇平、渡辺一夫などの様々な人々が署名運動に参加するようになる。

なぜこのようにたくさんの人々が李少年を助けようとしていたのだろうか。「李少年を助ける会」に参加した人々の中で大岡昇平と金達寿の発言を中心に注目したいと思う。

大岡昇平を含む多くの人たちは、死刑は18歳の少年に対して重すぎる判決であると主張した。特に大岡昇平は「在日朝鮮人の少年に社会の一員としての自己の責任を要求するのは酷ではないか」⁴と語った。そして「少年は朝鮮語を話すことができず、しかも朝鮮人であるために安定した職場に採用になっていない環境を顧慮すべきである」と語る。さらに「在日朝鮮人の問題は、根本的には政治的に解決さるべきだと思われるが、その目鼻がつくまでは、社会問題として、われわれ日本人も考えるべきだと思う。」と述べている。

金達寿も「理由なき殺人、動機なき殺人」とも言われることに反駁した。「民族的疎外、それは、かりに自分自身をおとしめることはあっても、その民族自体をまでおとしめることはできないものなのだ。その時は本当の絶望がくるからである」と語る⁵。

このように大岡昇平と金達寿は李少年を単に犯罪者ではなく、李少年を通じて当時の「在日」の社会の問題を取り扱っているのがわかる。成績が優秀な学生にもかかわらず貧乏な家庭のため本を買うことすらできない環境、さらに「在日朝鮮人」の国籍のため就職が出来ない李少年が置かれた環境を通じて、当時の日本社会の問題を指摘していると言えるよう。

4 『婦人公論』に文章を書いた小松川事件に関する大岡昇平の発言の引用は次のテキストを参考にした。『大岡昇平全集15』、「李少年は果たして兇悪か」、大岡昇平、筑摩書房、1996年、4月、37p～47p。

5 小松川事件に関する金達寿の発言は次のテキストを参考にした。『日本の中の朝鮮』、「小松川事件の内と外」、金達寿、太平出版社、1971年、3月、143p～209p。

韓国、朝鮮人の場合、兄弟の名には伝統的に「字まわり」という慣習があり、李少年と李少年の兄弟は全て「鎮」が入った名前であった。しかし李少年は兄弟の中で「鎮」を嫌って自分で「珍」にかえたと言われる。彼はその「鎮」が疎外される朝鮮人としての自分の象徴のように見えてならなかったのだろう。

金達寿は「貧乏と民族的疎外とに押しひしがれ、自身ではそれを買うこともできなかったドストエフスキーやスタンダールを読みふけりながら、いったい何を考えていたのであろうか。それはまたそのまま、かつての私自身の姿でもあったのである」と語っている。このように「在日」である金達寿は李少年に自分の過去の姿を投影しているのである。

「現在、李少年助命歎願運動には、在日朝鮮人の間から、盛り上がりがないのが特徴である。なぜかその事情を私は知らないのである。知ろうとしても、手がかりがないくらい事情は複雑である。ただ確かなのは、私自身を含めて、われわれ日本人が在日朝鮮人の問題に無関心でいるということである」と大岡昇平が先の文章で述べているが、これに対して金達寿は「在日」の立場から次のように語っている。「私を含めたわれわれは、これについては、まったく沈黙に陥っていたことはたしかな事実であった。なぜ沈黙していたか、それについては、少なくともそれは、無関心であったからではなかった。手のほどこしようがなく、暗い焦燥のうちにそれを見送っているよりほかなかった。」

引用文には金達寿が語ったように李少年助命歎願運動に積極的に参加できなかった「在日」の悲しさが感じられる。李少年に死刑が宣告された時、上告手続をとったのも都立大学の旗田魏氏であった。「李君の犯罪は、在日朝鮮人の運命の一つの縮図と申せましょう」と言った旗田氏の「嘆願書」を読んだ金達寿は涙を流したと話している。旗田教授は李少年とはまったく面識がないのにも関わらず李少年を助けるために全力を尽くした。

「この家族は、貧しい上に、朝鮮人という特殊のものです。かつて同胞と呼ばれた人々が、実に著しい差別的空気の中におかれていたことは、御承知のことと思います。李君は、日本で生まれ、日本で育ち、日本語しか話せぬ少年でしたが、朝鮮人ということは否定しようもありません。しかも本人は、自ら朝鮮人であることを嫌ったようです。これは、実に不幸なことです。朝鮮人としての自覚、自信を持ち得ないものが、朝鮮人に対する差別的空気の中におかれた場合、正常な成長は著しく困難であり、ゆがんだ人間になるおそれが多分にあります。こういう異常な環境に目をおおうことはできません。同じ社会に生きる人間として、またかつて同胞と呼んだものの一人として、こういう状態の存在を反省せずにはおれません。李君と同様の環境にあるものは、実は日本人の中にも少なくありません。(中略) これらの少年が明るく成長できる環境をつくってやらねばなりません。そういう努力が足りないのです⁶」と述べた旗田氏は「在日」に対する日本社会の問題を指摘していると共に李少年の抱えた問題はまた日本の少年たちの問題であることを指摘し

ている。

当時、大江は「在日」の問題に関して次のように語る。「在日朝鮮人には、北朝鮮人にしろ、韓国にしろ、りっぱな祖国があるわけですね。だから、日本人は、ちゃんと外国人とあつかうべきで、同化主義的なあつかいはよくない、という意見のようですね。アメリカ人をどうどうたる外国人としてあつかうように、朝鮮のひとにたいしても、そうするのが正当だということでしょう。ぼくは、正しいと思いました。」⁷

このように小松川事件は日本社会に置かれた「在日」の歪んだアイデンティティ、そして差別される彼らの実態が表面化された事件として日本社会に投げた波紋は大きかったと言える。

Ⅲ. 語られる「在日」

大江は自分が幼い時、森の少年として、「在日」に対して感じとり、想像したことを小説に反映したとよく語っている。「在日」が登場する大江の作品は『芽むしり仔撃ち』（1958年、『群像』）、『われらの時代』（1959年、『中央公論』）、そして『遅れてきた青年』（1962年、『新潮』）と『叫び声』（1962年、『群像』）、『万延元年のフットボール』（1967年、『群像』）などがあり、その他にも朝鮮戦争を背景とする短編の作品もいくつかある。

これらの作品は一人称の「僕（私）」という主人公によって「在日」という生き方が語られる。『芽むしり仔撃ち』では伝染病で村の人たちに捨てられた日本の少年たちと「朝鮮人部落」⁸の李という少年が登場し、『遅れてきた青年』では康という少年が、そして『叫び声』には呉という青年が日本人の主人公である「僕」の視線から語られている。さらにこれらの作品に登場する主人公と「在日」の少年は友達であり、深い友情を交わすという共通点を持っている。

また大江の小説によく登場する「在日」の姿は『芽むしり仔撃ち』では父親を亡くした少年が食べ物盗む貧しい姿であり、「朝鮮人部落」は「日本人の生活圏からいくぶん離れた条件の劣悪な環境にある」と書かれているように貧困な生活である。

6 旗田魏氏の手紙の内容は、金達寿氏が小松川事件の真実を語る時に書いた文章を参考にした。テキストは次のようである。『日本の中の朝鮮』、「小松川事件の内と外」、金達寿、太平出版社、1971年、3月、208p。

7 『世界の若者たち』、大江健三郎、新潮社1962年、8月、154p、当時「在日韓国人」だという身分を堂々と明かして野球選手として活躍した張本勲（韓国名：張勲）選手との対話集に収録されている。

8 「朝鮮人」と「朝鮮人部落」という言葉は一般的に差別的な用語ではあるが、大江の小説の中ではよく使われているのでそれをそのまま引用することにした。

『叫び声』にも「呉鷹男の集落の若い人間は、家具工場や鉄工場や運搬会社の過重労働の沼の奥ふかく魚のように無言でもぐっていた。かれらは鈍感な獣のような確実なところがあった。彼らの生きている世界は缶のように閉ざされていたので、彼らは外界か黴菌にはおかさされず内部からの崩壊にも無縁で恒常的だった。」⁹と描写されている。また「簡易宿泊所」、「共同寝室」、「埋立地」などの言葉でイメージされている「朝鮮人部落」が描かれているように彼らは誰より貧乏な生活を過ごしているのがわかる。このように大江の小説に描かれている「在日」の姿は貧困な労働者のイメージ以外の何ものでもない。

小説の物語の背景になる「朝鮮人部落」と「在日」は「自分の回想の中から現れるものを書いた」¹⁰と大江が言及しているように、小説には当時の「在日」をめぐる情勢がよく描かれている。『遅れてきた少年』では「あの日から朝鮮人部落では昼も夜も音楽をつづけているのだ。それがお祭りなのだ。」¹¹というふうに戦争が終わった後の「朝鮮人部落」の様子を描かれている。また『万延元年のフットボール』にも太平洋戦争の間、強制的な森の伐採労働に従事していた朝鮮人の人たちの話が背景として描かれているのがわかる。このように大江健三郎の小説の「在日」は小説世界の本質に関わっているのである。

『叫び声』は主人公の「僕」が三人の青年たちと同居した青春時代を回想する物語であるが、主人公の「僕」は呉については「東京の最も貧しい朝鮮人部落から来た人で切実に孤独を感じているようだった」と表現されている。呉という人物は前に述べたように小松川高校事件の犯罪者である在日の少年を素材にしているが、『叫び声』に描かれているように当時小松川事件の李少年は実際東京の埋立地にある家に住んでいたと言われる。

大江は小松川事件に対してエッセイ¹²で次のように語っている。「小松川高校事件の犯人のように、暗い顔をした在日朝鮮人の不幸な側面を一身にせおうような若い朝鮮人も日本に住んでいるのであって、日本人と朝鮮人の問題は、つねにもっとも重要な日本の青年の問題だと思う。」このように小松川事件は大江にとっても大きな影響を与えたと思われる。つまり「在日」をめぐる朝鮮の情勢に深い関心を持っていた大江は「僕」という語り手の目を通して「在日」の青年たちを観ている。

『叫び声』には李少年のこのみならず当時の日本と朝鮮半島をめぐる政治情勢も書かれている。例えば「日本の朝鮮人たちを、北朝鮮に送り帰そうとする計画が静に、影の中

9 『叫び声』の本文の引用はこれからは次のテキストを参考にする。『叫び声』、大江健三郎、講談社、1990年、3月、

10 『日本の「私」からの手紙』、大江健三郎、岩波書店、1996年、1月、58p。

11 『遅れてきた青年』の本文の引用は次のテキストを参考にした。『大江健三郎全作品4』、大江健三郎、新潮社、1966年、12月、53p。

12 『世界の若者たち』、大江健三郎、新潮社、1962年、8月、154p。

で推し進められている。」という一節は当時の「北朝鮮帰還事業」を連想させる。その時の「在日」の青年たちの姿も以下のように描かれている。

態度を決めなくてはならない、朝鮮人民共和国という奇怪な夢の国に対する態度、未来世界への態度。そこで焼酎の酔いを武器に若者たちは、冬曇りの空のしたで火力発電所が燃やす石炭の膨大な煙の匂いと味を感じながら、石を投げ、シャドウ・ボクシングをし、屈伸体操をし、ものすごく巨きい不安と当惑の渦まきの中で、ひとつの選択を、頬骨のたかいポーカア・フェイスでやってみようとしているわけだ……

このように「僕」の目に映った「在日」の青年たちは国家を選択しなければならないという当惑に満ちた不安な姿である。さらに『叫び声』の呉には国家によって救われない悲しい姿も読み取れる。

朝鮮の二つの国に対しての政治的な顧慮に期待をかけていた弁護人は失望していた。朝鮮では、ひとつの国は新しい軍事条約をむすび、もうひとつの国には学生たちの暴動がおこるといようなことがあって、呉鷹男の声はそこにとどく余裕がなかった。それも呉鷹男が救助をもとめる声をはしたらん話だが、彼は独房で微笑して沈黙していただけなのだ。

この場面は当時小松川事件の李少年を助ける署名運動が行われた時、「在日本朝鮮人連盟」をはじめ多くの「在日」に見放された事実があったことを描写していると推測されるが、「僕」の目に映る「在日」の青年たちは貧困な姿と共に揺れ動く両国の間で不安と不信を抱えた姿である。さらに朝鮮の国から無視された「在日」の青年は日本という社会でも助けられない存在なのである。

「俺はこの世界から拒まれている。俺はこの世界の正規の人間じゃない。」という呉の言葉には話には差別という影が落とされている。この差別という言葉は『叫び声』に登場する虎の話にも表現されているが、虎は「日本には人種差別はないというんだけど、それは保護施設の連中などはみな、そう信じているんだけど、僕はどういう形であられるか知っているよ」と語る。このように「僕」の視線によって語られる「在日」は貧困な姿で日本にも朝鮮にも助けられない差別的な存在として描かれている。

IV. 属しえないあいまいな存在

殺人という罪を起こした呉鷹男の最初の公判の時「あなたの息子さんはなぜ、あのような犯罪を犯したのですか？」の質問に「息子は朝鮮人でもない、日本人でもない、なんでもない者に育ったのやからねえ、そやから犯罪人にでもなりたがったのんやあ！」と呉の父親が叫ぶ場面がある。父親が朝鮮人であるのにも関わらず母親によって日本人として育てられた呉であるが呉は日本人にもなれなかったのである。

「なぜだかわからないが、あいつらみんな、俺のことを仲間はずれにしているよ、おれは歓迎されないよ」と呉が母親に言うと、「それはおまえが朝鮮人じゃないからよ」と呉の母親が答える場面のように、呉は朝鮮人の仲間にも入れないのである。呉はどこにも属することのできないあいまいな存在なのである。

俺は他人の国の他人の夜更けに他人の言葉を喋っている。明日の朝俺は他人の国の他人の朝を歩くだらう。そんな感じは欲求不満にすぎないと思うこともあるのだが、とにかく実感ということ言えば、おれにはこの世界にぴったりして生きているという実感が無いんだよ。そしてそれはこの世界におれが、間違っ入り込み、間違っ居つづけているからだと感じるわけだ。

上の場面のようにどこにも属することができない呉が自分の正統性を志向するのは不可能である。このような呉の姿は「僕」の目には「孤独感が深まった」、「不満をもち」、「渴望し」、「不安に脅かされていた」というふうイメージされている。

「呉鷹男の話によれば、authenticな人間は現実世界にちゃんと市民権を持って生きている人間のことだ。その国の人間、本物のその国の人間、間違いなくこの土地の人間。そしてそれが何に原因したのかはわからないが、彼は authentic ではない人間なのだ。」つまり、「僕」は原因についてはわからないが、呉が「authentic」な人間ではないことを感じているのである。

実際小松川事件の取材によると、李少年は民族的な意識は全然持ってなかったが、中学を卒業し就職するたびに朝鮮人という国籍のため就職ができないという状況の中でそれを認識するようになったといわれる。つまり李少年は就職という共同体との関わりの中で自分の正統性の混沌を感じるようになったのである。

呉と同じように登場する黒人との間で生まれた虎もアフリカへ行きかかっている。すなわちこのように「authentic」ではない若者を描くこと、「authentic」と反対のあいまいな存在として若者を描くことに大江の文学の主題があると言える。

『叫び声』の呉が自分のアイデンティティを探すために苦悩していることは次の場面によく表れている。「日本にいるよりいいだろう、日本を脱出したいだけかもしれない」と現実から脱出しようとしていたが、彼の脱出は出来ないものである。このような呉の苦悩は遂には自分を怪物だと認識するようになる。

俺が自身の国からきた怪物だということを間接的に立証したんだ、しかもこの世界になんとか入り込んで嫡出子の安心感を味わおうと悪戦苦闘してきた。

つまり現実に対して否定する呉は遂に自分を怪物だと認識する引き裂かれた自画像を持つようになったのである。小松川事件の李少年が反・社会的な行動をしたように、呉も社会に対して否定的な姿勢を持つようになる。結局呉は犯罪の道を選ぶのである。

このように『叫び声』にはあいまいな存在としての青年たちが正統性を持つためには犯罪を起し、犯罪によってのみ社会と関われるという問題を提示しているのがわかる。

「おれは敵の神におれの存在を拒まれているわけだ。おれが存在していると主張するためには礫などという不確かなものでなく、もっと確実な方法で神の眼をかすめて、この世界にももの凄い結果を引き起こしてやるほかない。そのときはじめて、おれはこの現実世界におれ独自の危険な *authenticité* をしっかりもって存在していることを証明できるのだ。ああ、そうではなければおれは本当に自分が生きているのかどうかさえわからない」と語る呉の姿には歪むアイデンティティが攻撃的なものになっていく過程をよく読みとることができる。

呉と同じように登場する『叫び声』の青年たちも不安、暴力、悲惨、死などの言葉でイメージされている。例えばダリウスはアメリカ人として反米デモに参加する。虎は黒人兵の服装で銀行強盗という行為を真似する。しかしダリウスは日本学生に殴られる。虎も失敗し白人兵に撃たれて死ぬ。さらに当時の安保の挫折状況を反映している「僕」はエジプトで戦争が起こって大学で義勇軍が募集される噂が広がるうちに咯血して倒れて療養所ですさまじい死の恐怖を感じる。

このように朝鮮人の父親のことを隠しつつける母親によって日本人として育てられた呉のアイデンティティの歪みと否定は遂に身体的な暴力、そして死という形で表現されるのである。

すなわち『叫び声』に登場する混血の青年たちは自分の位置を犯罪者として定めるしかなかった。これは「僕を死刑にしてください、僕が死刑になった瞬間、僕が怪物であったことを疑うことは誰にもできなくなるから」と語る呉の話からもよく現れているのがわかる。

呉燦^{おちん}……その瞬間、呉鷹男は、なぜ自分がこの世界に authentique に生きているという安堵感をもつことのできない人間となったかを、なぜこの現実世界の私生児となったかを理解する手がかりが自分にあたえられたのを感じた。呉燦^{おちん}として生きるかわりに架空の呉鷹男として贗の生涯を生きることを母親に強制された幼い日から、かれは嫡出子の感覚を失い始めたのだ。この世界にぴったりした正規のメンバーであるという感覚をうしない始めたのだ、この世界にぴったりした正規のメンバーであるという感覚を。呉燦^{おちん}……ともう一度母親が叫んだ。

この部分は、呉の母親が呉の本名を裁判で呼ぶ場面であるが、呉を日本人として育てた母親からの呼び出される呉の本名がもたらした意味は大きいだろう。当時自分が「在日韓国人」であるのを堂々と明かして野球選手として活躍した張本選手は大江との対話の中で自分の母親について次のように語っている。

まあ僕が一番尊敬してるのは、おふくろですよ。いつも僕にそういうことをいったのですからねーお前は韓国人であるし、そういうことに胸を張ってなんせえ、と。¹³

張本選手の母親とは対照的であった呉の母親の叫び声、つまり最初で最後に母親から自分の本名を呉（クレ）ではなく呉（オ）と呼ばれる呉鷹男は、呉（オ）が否定された時から自分の主体性が失われていたのに気が付いているのである。

このように小松川事件の李少年が持った二つの名前と、呉が呼ばれた二つの名前が持つ意味は、「日本」と「在日」という二つの極に引き裂かれた「在日」の姿である。彼らはどこにも属することのない揺らぎの中で位置を失って悲しい姿で生きているのである。

V. 超える境界

『叫び声』の僕と三人の青年たちはヨットで遠洋を航海することを約束する。作品には海に開かれた神戸や横須賀が登場する。「友人たち号」の名がつけられたヨットで青年たちは他の場所へ行く夢を持つ。

青年たちの中には、先に述べたダリウス・セルベゾフというアメリカ人がいる。彼の祖父はブルガリアから移住したスラブ系のアメリカ人である。もう一人の虎という青年はアメリカ・ネグロの父親と日系移民だった母親との間に生まれた人物である。そして「在日」

13 『世界の若者たち』、大江健三郎、新潮社、1962年、8月、159p。

である父親と日本人の母親の間に生まれた呉という青年がいる。

虎は自分のことを黒人の血と黄色人の血が混じった人種上の虎だと思っている。そしてみんなに虎と呼ばれる。呉は在日の人である父親のことをできるだけ隠しおおすように呉をしつける日本人の母親によって日本人として育てられた。

このように『叫び声』に登場する人物は主人公の「僕」以外はみんな民族的、人種的な区別があいまいな存在として設定されている。しかし『叫び声』のモデルとされている小松川事件の李少年の両親は実際は「在日」である。それにも関わらず、大江は日本人の母親と「在日」の父親として呉の両親を設定している。『飼育』という作品にもアメリカ兵士として登場する人物が白人ではない黒人として設定されている。

このように民族、人種的にあいまいな人物を設定するのが大江作品の特徴であると言えるが、このようなあいまいな設定は民族、人種的なものだけではない。ダリウス・セルベゾフは朝鮮戦争の時、国連軍の兵士として戦場に行ったが、癲癇の発作におそわれて本国に送還された青年である。彼はアメリカ兵士が日本人を殺した事件で、抗議の反米デモに参加しアメリカを批判するが逆に日本の学生たちに襲われてしまう。

このように大江の作品はアイデンティティが個人のレベルではなく国家と民族などによって翻弄され、そして個人の境界が共同体によって括られることを繰り返し表現する。

これは戦後日本に生きていた青年の危機感を表した大江のテーマであり、『叫び声』の日本人である「僕」にもよく現れている。

「誰かひとり遥かな救いをもとめて叫び声をあげる時、それを聞く者はみな、その叫び声が自分自身の声でなかったかと、わが耳を疑うということだ」と『叫び声』の冒頭にはフランスのある哲学者の言葉が引用されている。そして「その叫び声を聞く者の一人だった」と「僕」は語っている。これは作品が書かれた1962年の時期から考えると、安保闘争が失敗し、反対運動に参加した多くの人達について挫折感と政治不信感をもたらした時期である。

「この国家、この国民、この政治が現実性をうしなつたようだった。僕はすでに、架空の国家、架空の国民、そして蜃気楼の政治のなかで生きていた。」と語る、現実感を失っている「僕」の姿にも当時の時代の状況を感じることができる。これは当時「六〇年代を生きる若い日本の知識人として全面的な行きづまりがあった」¹⁴と語った大江の意識が「僕」という人物に反映されたものと思われる。

このように『叫び声』ではあいまいな存在としての青年たちと「僕」によって国家、民族、そして現実性の境界が崩されているが、それは海という場所でも現されている。前に

14 『日本の「私」からの手紙』、大江健三郎、1996年、1月、63p。

も言及しているが、作品には彼らを解放してくれる海という場所に開かれた神戸や横須賀がよく登場する。しかしダリウスが性犯罪を起こして警察に捕まえる場所は神戸であり、虎が死ぬ場所は横須賀である。彼らの遠洋旅行の夢が虚しいもので終わるように、海という境界は希望とともに挫折をもたらす場所としても描かれている。

このように大江は様々なあいまいな境界を設定して逆に新しい境界を再構築しようとしているといえよう。特に在日を典型とするあいまいな青年たちを設定することによって民族と国家によって括られた「日本共同体の境界」を越えようとしている。その役割を果たすのが「在日」である。

『芽むしり仔撃ち』に登場する李少年も同じ役割を果たしている。軍隊から脱出した兵士が捕われ、殺された時に、「俺たちはかくまっておいたのに同じ日本人同士で殺しあう。山へ逃げこむ奴を、憲兵や巡査や、竹槍をもった百姓や、大勢の人間が追いつめて突き殺す。あいつらのやる事はわけがわからない」と李少年は語る。

これに対して柴田勝二氏は次のように指摘している。「<作者>はこうした組織からの脱落者や共同体への反逆者を決して容赦しない主体として、村と軍隊を並行的に提示し、それらを包括する共同体として、日本という国を浮上させている。それによって、やはり疎外の対象となる朝鮮人の李が、脱走兵に対する処理を目にして感概をもらすように、異端的な存在を許容せずに消去しようとするのが日本人という総体的な次元に帰らせられる行為であることをしめしている。」¹⁵ このように柴田氏が指摘しているように大江の小説に登場する「在日」は当時の日本と日本人を相対化している存在なのである。

『叫び声』の最後には仲間を亡くして一人でヨーロッパに旅に出る「僕」が描かれている。「僕はじつに巨大な責任、肩の重荷をそのまま地上におきざりにし、回避して、逃亡していくのだと感じた。」と語る「僕」は開放感を感じているように見える。呉と同じように「僕」も脱出したかもしれない。しかし「僕」はヨーロッパで決して安堵感を感じることができなかった。「自分の耳の奥ふかく聳しつづけている叫び声、荒涼として痛ましい夜明けの叫び声をきいていた。それは呉鷹男と僕自身の恐怖の叫び声のように思われた。」と語る「僕」は呉の叫び声を聞きながら現実から回避した「僕」に対して自問するのであろう。

「私は一方では日本人のアイデンティティの構造が書き込まれているテキストでもありますし、また同時に韓国・朝鮮人のアイデンティティが書き込まれているテキストであります」と語る姜尚中氏は次のように述べる。

15 『<作者>をめぐる冒険』、柴田勝二、新潮社、2004年、7月、138p。

わたしは民族的マイノリティの〈境界〉が決して不変の安定した意味の参照枠組みによって支えられているわけではないことを発見しました。韓国籍、朝鮮籍、日本籍、二重国籍、さらにジェンダーや出身地、安住地域、母国語の習得度や法的地位の差異、通名や民族名、「帰化者」の民族名獲得など、差異の〈境界〉は異なった集約点との関係で不断に再定位されていくことがわかります。¹⁶

姜尚中氏の話のように、大江はあいまいな境界の中で生きている「在日」の呉の姿に「僕」を重ねて、新たな「境界づくり」を追求していると思われる。

VI. 終わりに

小松川事件との李少年をモデルとして書いた『叫び声』はその事件の事実と共に大江の思想が典型的に描かれている作品である。

「日本の近代化はひたすら西欧にならうという方向づけのものでした。しかし日本はアジアに位置しており、日本人は伝統的な文化を確乎として守り続けもしました。そのあいまいな進み行きは、アジアにおける侵略者の役割にかれ自身を追い込みました。」と語る¹⁷大江の話のように、日本で住まざるをえなかった「在日」は日本の近代化の歪みを現している存在である。

「僕」が生きている社会には異邦人として差別される「在日」の傷跡がある。彼らの個人のアイデンティティは国家によって翻弄される悲しいものである。『叫び声』の青年たちが追求した遠洋航海をする夢は虚しいものであった。つまり彼らの個人的な主体性が無効になる現実があるのである。しかし、民族、国家を超えて友達になった呉と虎、そして「僕」を通じて大江は境界を超えようとしている。

『芽むしり仔撃ち』で「日本共同体」から疎外された感化院の少年たちと村人から見捨てられた朝鮮人の李少年、そして脱出兵が森の中に集まって新しい共同体を作っているように、『叫び声』においても疎外されているあいまいな存在としての青年たちと日本人の「僕」が同居しながら新しい関係を作っている。

「開国以後、百二十年の近代化に続く現在の日本は、根本的に、あいまいさの二極に引き裂かれている、と私は観察している。のみならず、そのあいまいさに傷のような深いしるしをきざまれた小説家として、私自身が生きているのであります。」そして「世界の周

16 『文化』、中村雄二郎、姜尚中、岩波書店、1999年、7月、72～73p。

17 『あいまいな日本の私』、大江健三郎、岩波書店、1995年1月、8p、引用の部分は1994年12月7日にストックホルムでノーベル受賞記念講演の内容の一部である。

縁にある者として、そこから発展しうる、人類の全体の癒しと和解に、どのようにディセントかつユマニスト的な貢献がなしうるものかを、探りたちと願っているのです」と大江健三郎は語る¹⁸。

つまり、大江の『叫び声』は「あいまい」という大江文学の本質的なテーマを提示した作品なのである。

(神戸大学大学院文化科学研究科 国文学専攻)

参考文献

- 大江健三郎 1962 『世界の若者たち』 新潮社.
 大江健三郎 1974 『文学ノート：朝鮮人』 新潮社.
 大江健三郎 1995 『あいまいな日本の私』 岩波書店.
 大江健三郎 1996 『日本の「私」からの手紙』 岩波書店.
 黒古一夫 1990 『村上春樹と同時代の文学』 河合出版社.
 黒古一夫 1998 『大江健三郎とこの時代の文学：在日朝鮮人文学の現在』 勉誠社.
 黒古一夫 2003 『作家はこのようなして生まれ、大きくなった：大江健三郎伝説』 河出書房出版社.
 金達寿他 1971 『日本の中の朝鮮：日本の中の朝鮮の若者たち』 太平出版社.
 福岡安則 1991 『同化と異化のはざまで：「在日」若者世代のアイデンティティ葛藤』 新幹社.
 福岡安則 1993 『在日韓国・朝鮮人』 中公新書.
 田中宏 1991 『在日外国人』 岩波新書.
 深川英雄 1991 『キャッチフレーズの戦後史』 岩波新書.
 渡辺広士 1995 『大江健三郎』 審美社.
 中村康行 1995 『大江健三郎：文学の軌跡』 新日本出版社.
 大岡昇平 1996 『大岡昇平全集15』 筑摩書房.
 桑原丈和 1997 『大江健三郎論』 三一書房.
 一條孝夫 1997 『大江健三郎：その文学世界と背景』 和泉書院.
 小熊英二 1998 『日本人としての境界』 新曜社.
 中村雄二郎・姜尚中 1999 『文化』 岩波書店.
 姜尚中・森巢博 2002 『ナショナリズム克服』 集英社新書.
 井上ひさし・小森陽一 2004 『座談会、昭和文学史第六巻』 集英社.
 愛媛新聞在日取材班 2004 『在日－日韓朝の挟間に生きる』 愛媛新聞社.
 柴田勝二 2004 『<作者>をめぐる冒険』 新潮社.
 芳川泰久 2004 『横断する文学』 ミネルヴァ書房.

18 『あいまいな日本の私』、大江健三郎、岩波書店、1995年1月、8p。